



Tokyo Gakugei University Repository

東京学芸大学リポジトリ

<http://ir.u-gakugei.ac.jp/>

Title	3 他者の視点を取り入れる : 保育検討会での活用 (2) 4歳児学年 (5月17日保育検討会より) (III 保育記録を活用する) (fulltext)
Author(s)	大澤,ちづる
Citation	研究紀要 / 東京学芸大学附属幼稚園, 24/25: 58-62
Issue Date	2013-12-07
URL	http://hdl.handle.net/2309/148359
Publisher	東京学芸大学附属幼稚園
Rights	

(2)4歳児学年(5月17日保育検討会より)

1) 観察場面に選んだ理由

転入児を除くほぼ全員が3歳児学年からの進級児である。進級から1ヶ月ほど経った頃、3～5人の幼児が同じ場所に集うようになってきた。しかし、自分たちで場をつくり、遊ぼうとはするが、その場に座っているだけのことも多く、何をしたいのか教師にも捉えにくい姿が見られた。遊びの中で、友達と一緒にいたい気持ちの支え方について考えたいと思った。

2) 実践者の記録

①経過

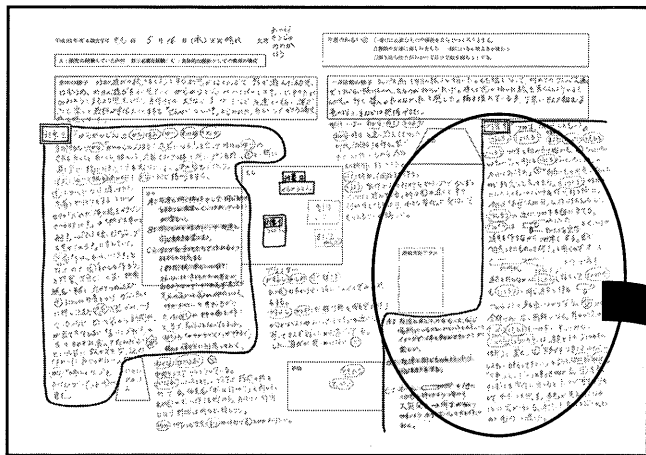
G児は、新学期が始まり、積み木で家や基地をつくって遊ぶことが多く、教師や教師を介して友達を呼んだり、空き箱やペーパー芯などで電話や武器など遊びに使うものを作ったりして遊ぶ日が続いていた。

5月9日(木)、G児は「ハイパーレスキュー」と言って、積み木を並べ始めた。教師が必要なものを尋ねると「ヘルメット」と答えたので、教師はヘルメットの絵を描きお面ベルトに貼り付けてヘルメットを作った。更に、G児の希望で、教師はそのヘルメットに『はいばーれすきゅー』と書き、G児は、黄色く色塗りをして仕上げた。ハイパーレスキューという言葉の響きに魅かれて、一緒に遊びたい幼児が集まってきた。また、同じようなヘルメットが欲しくなり、教師に同じものを作ってもらったり、自分で真似て作ったりする幼児もいた。G児は、広告紙を丸めて作った棒の先に紙テープをつけたものを道具として作り、ヘルメットとその道具を家に持ち帰っては、幼稚園に持ってくることを繰り返した。5月14日(火)、G児は「バッチがいる」と言ったので、教師が『はいばーれすきゅー』と書いて、胸につけられるような大きさのバッチを作ったが、G児は「違う、犬が書いてある」と言った。翌日15日(水)、教師は犬を描いたバッチを用意し、色塗りができるように準備した。G児を含め、数名の幼児がバッチを作り、胸につけて遊んでいた。

**この部分は
公開に適さないため
掲載できません。**

場をつくって遊ぶ

②前日の記録 (5月16日)



ハイパーレスキューごっこ

G児が積み木を組み立て始める。教師が「ハイパーレスキュー？」と聞くと、G児「ハイパーレスキュー、今日はお休み」と言う。教師「面白いものを用意してきたのに、残念」と言って去る。I児がG児の近くに来て、積み木を組み立て始める。G児はペーパー芯とセロハンテープの芯をつなぎ合わせて道具を作り、自分の積み木に戻ると、教師に「面白いものって何？」と聞く。教師が新聞紙とスズランテープでホースを作って渡すと、持ってみるがホースを積み木の上に置く。G児は自分の道具をI児に見せ、I児も同じものを作る。2人で同じものを持ち、セロハンテープの芯の穴から色々な声を出し合って、笑い合っている。G児とI児は2人の積み木をつなぎ合わせ、広い場となる。そこへH児が来て、3人で積み木の上に乗っている。教師が「火事です、火事です、ハイパーレスキュー出動してください」と言うと、G児はホースを持ち、火事を探しに動き始める。I児はついて行く。教師が赤色を塗った段ボールを立てると、G児はホースを使って消す。(赤色が見えなくなるように倒す) A：友達と同じものを持って同じ場所にいること、ハイパーレスキューのイメージで身体を動かしたことが楽しい。B：友達と同じものを持ったり同じ動きをしたりする。C：ホースを他の幼児も持てるように、数を増やす。火事を消す動きが分かりやすいように、段ボールの火を作って置く。

③当日の記録 (5月17日保育検討会担任自評より)

G児は2日前に作った緑色の玉を持って登園する。保育室に用意されていた火に玉を投げて、倒す。それから、朝の支度を始める。H児とI児が積み木を「ハイパーレスキュー」と言って組み立て始める。G児は、製作コーナーで道具を作っている。G児は、道具が出来上がると、ハイパーレスキューの場所に行き、投げて倒そうとするが、倒れない。I児は、足で火を消し始め、「足に水をつける」と言って画用紙を足裏に付け始める。I児が自分から動き出すことは珍しく、担任は、足に水をつける考えに「面白いね」と言う。H児もI児の真似をして、火は足で消されてしまう。

しばらくして、教師が他の遊びから戻ってくると、G児は「やっつけるもの、忍者」と担任に言う。担任は、大きめの段ボールに忍者の絵を描き、色塗りができるように渡す。G児、H児、I児が群がり、頭をつき合わせて、「手裏剣を書こう」「青で塗ろう」などと言いながら描き始めた。

3) 観察者の記録

① G児理解について

記録 a

I 児「支度、終わったの？」
G 児「終わった」
I 児「ハイパーレスキューやろ
う！」
G 児は教師へ話しかけに行く。

記録 b

H 児「G 君、ハイパーレスキュー」
G 児「先、作ってるから」
G 児は教師の近くに行き、ハイパーレスキュー
のバッチをつけてもらう。
G 児は教師に自分で作った玉を見せると、玉を
投げて火を消す。
G 児「全部、倒したよ」と教師に言う。

観察者からは次のような意見があった。

- ・ 幼児同士の会話を見ると、言葉数は少なく、会話をしても一言で終わってしまっている。G 児は、教師への働きかけが多く、自分の言葉を分かってくれるのは、教師しかいないと感じているのかもしれない。

② 教師の援助について

記録 c

I 児と H 児が 2 人で積み木を組み立て、場所をつくり始める。会話もなく黙々と積み木を運び出来上がる。G 児は出来上がったところに入る。積み木が崩れて、G 児は 1 回直す。(火は環境として出ている)
G 児は家から持ってきた玉をずっと持っていた。G 児と I 児は 2 人で京花紙やティッシュを丸めて玉を作る。
I 児は広告紙を丸めた棒の先に紙テープをつけた道具をロッカーから持ってくる。G 児も 同じようなものを持ってきて、火にぶつける。
G 児・H 児「これ、なに？」(ホースについて)
I 児「ホースだよ」
H 児「3 人で～」3 人ともホースを持つ。
G 児「いらないんだ、口で火消しちゃうから」
H 児「ホースいるけど…」
H 児はホースを持ちたかったが、G 児と I 児はホースを使わない。
G 児と I 児は、それぞれが製作コーナーに行き、それぞれの道具を作る。
G 児：箱と紙テープをつなげたもの
I 児：広告紙を丸めた棒
H 児：ホースで遊ぶ

観察者からは次のような意見があった。

- ・ 前日の記録の中で担任は、「同じ動き」に着目して A, B, C を書いている。しかし、同じものを持つ姿、相手のものを見ている姿、同じものを持ちたいが拒否される姿、それぞれの作りたいものを作る姿に着目すると、読み取りが変わってくる。

記録 d

G 児は手に持った玉を段ボールの火にぶつけて火を消す(倒す)
G 児「先生、全部倒したよー」
教師「本当だ、でも、まだ、ついていますよ」(まだ倒れていない火を指して)
G 児は積み木でつくった場の上でフラフラする。

記録 e

G児は教師に箱で作った携帯電話を渡し、「4この字をうって」(電話をかけて)と言う。

G児「できた？(4この字)」

教師「まだです」

G児は火事のそばへ行く…しばらくして

教師「じゃ、地震発生！地震発生！」と携帯電話を使ってアナウンスをする。

G児はにこーっと笑い、3人で火を消して遊ぶ。

観察者からは次のような意見があった。

- ・ G児の教師に受け止めてもらいたい思いがみてとれる。教師に自分のものを見せる姿が多いが、教師の対応により、その気持ちが満たされている場面は少ない。教師の援助は、幼児への応答、製作の補助、遊びの流れを変える言葉が多く、実際に幼児の言葉、動き、遊びに「同調」することがなかった。幼児の遊びの中に教師も入り、幼児の言葉や動きを真似ることで、何を楽しんでいるかが、分かってくるのではないだろうか。

4) 考察

① 幼児理解について

教師は、G児のハイパーレスキューという名前へのこだわり、ハイパーレスキューに必要なものを作る遊びの姿を記録に残し、そこから、どのような遊びになったら楽しいかという援助の方向を考えていた。教師にかかわりを求めることも多いG児について、なぜそのような傾向が強いのか、深く掘り下げずに、遊びに視点を当てていた。しかし、観察者からは、H児やI児は話をしながら遊んでいるが、G児はほとんど言葉を発することはなく、G児自身、自分の言葉が友達には伝わりにくいことを既感しているのではないか、だから教師であれば分かってもらえるという思いが教師へのかかわりの多い理由なのではないか、という指摘があった。D児の言葉が少なく、あまりうまく相手に自分の思いを伝えられないもどかしさを教師自身も感じていたにもかかわらず、教師の過去の記録を見てもG児の言葉に対する記録は記されていない。教師は、「ハイパーレスキュー」という遊びに他の幼児も参加しようとする姿を嬉しく感じ、また、それを嬉しそうにしているG児の姿から他の幼児にもこの遊びを広げたいと願った。しかし、それがG児を理解することから離れていってしまったように思う。教師が捉えにくいと感じていたのは、G児の思いそのものでもあったように思う。G児個人の幼児理解へ立ち返り、G児の思いを受け止め教師が言葉で表す、教師が他の幼児との仲介に入るなどすることがG児の幼児理解を深め、そこから遊びの発展につなげることができたのかもしれない。

② 教師の援助

ハイパーレスキューという名前に魅力を感じて集っている3人が、分かりやすい動きを一緒にできたら楽しさを感じられると教師は考え、ホースや火の数を増やし、環境を用意した。しかし、観察者の記録からも分かるように、火を消す動きはそれぞれで、ホースを使おうとしたのはH児のみであった。ハイパーレスキューとして友達と一緒にしたいが、持つものや動きなどのやりたいことは、それぞれであることが読み取れる。当日、教師は前日の記録を受けて、同じものを使い、同じ動きになるようにまとめようとしすぎたため

に、幼児が動きを楽しんだり、繰り返し遊ぼうとしたりしなかったのだろうと感じている。幼児のやりたいことと、教師の捉えの違いがあったといえるだろう。

また、検討会の中で他の教師より、G児から「やっつけるものがほしい、忍者！」とハイパーレスキューとは異なるイメージのものが出てきたのは、前日の担任の記録から、G児自身は、既にハイパーレスキューをやろうとはしていなかったのではないかと、という意見もあった。4歳児学年の5月頃において、1週間以上も続いている遊びが、遊びとしては終息に向かっていと捉えることは十分にできた。しかし、教師は、新しいものを用意して、遊びを続けてほしいと願った。教師が遊びを長く続けさせたいと願ったこと自体に無理が生じていたとも考えられる。

G児は、教師に何度も声をかけてくるが、教師はG児を受け止めるというよりは、遊びに使うものを作って、それを使って遊ぶ、という方向にもっていきたい思いが強かったように思う。それゆえ、遊びの流れを変える言葉も多かったのだろう。教師が幼児に寄り添うことで、幼児自身が次の遊びの流れをつくっていくところを、教師の思いばかりが先行してしまったと感じている。

更に観察者からは、教師が言葉で応答するだけではG児は満たされず、繰り返し教師を求めたのだろう、という指摘を受けた。教師が同じ動きをする、遊びの中に入ってみることで幼児自身も教師を受け止めてもらえたことを感じ、次の遊びへの方向が見えたのかもしれない。

5) 次の保育につなげる

その後、G児は、『忍者』の遊びを始めたが、教師は言葉が少ないこと、友達とつながりたい気持ちがあることを意識してかかわっている。また、友達への声かけや友達と同じものを持っている時など、教師が仲介したり、教師が言葉にして気付かせたりもしている。ある日、G児がパーテーションで『忍者じょう』をつくると、それを真似てX児、I児も『忍者じょう』をつくり、合体させようということになった。教師もその遊びの中に入り、どのように合体させるかを一緒に考えると、段ボール、積み木、パーテーションを使うなどそれぞれの思いが言葉や動きとして表れ始めた。幼児それぞれが言葉や動きで思いを表せる環境づくりが、幼児を生き生きとさせ、それが次の遊びへとつながっていくことを実感している。